

第98回 「さんか・さろん」 まとめ
・2020年9月15日(火)
・「谷瀬集落のものづくりと移住促進」
・馬場建一さん
(十津川村産業課長・谷瀬集落住人)

2020年11月に奈良県十津川村でフォーラムをやる予定でしたが、コロナ禍で延期になりました。がっかりしていたスローライフ学会会員は、その十津川村からの話題を熱心にかがいました。会場とzoom利用での「さんか・さろん」、初めての試みです。

十津川村谷瀬集落には、スローライフ・ジャパンが長年通い、集落のむらおこしの寄合をコーディネートしています。その谷瀬住民でもある馬場さんから、小さな集落に移住者が増えるまでのお話を伺いました。まずは写真を見ながらの馬場さんの解説です。

.....



【谷瀬の今ができるまで】

十津川村は奈良県の一番南にある、ちょうど紀伊半島のど真ん中の位置。日本一広い面積を持つ村で、672㎡ある、その一番北にあるのが谷瀬集落。関西では割合有名な「谷瀬の吊り橋」がある、長さ297m、高さ54m。歩道専用橋で橋を渡ったところには地元で建てた「つり橋茶屋」があり軽食や農産物売っている。

2011年の秋9月に紀伊半島大水害があった。4日間で1300ミリの雨が降り、山々が崩れ、



家も流され、村内でも被害がでた。東日本大震災の年なのであまり知られていないが大変だった。国道に掛かっていた橋が落ちて孤立した。物資が来ない、救急車も来ることができない。

そんなことがあってから谷瀬集落では今後を真剣に考えるようになった。子供がいなく、皆が年を取り、谷水の管理も大変になっていた。このままでは自分たちで集落を維持できない。外部の力を借りなくてはということだった。

皆で話し合う「寄合」を行い、外の人と繋がるためにまずは吊り橋の奥にある集落を歩いてもらおうということになった。最初にマップを作り集落内の道を「ゆっくり散歩道」と名付けた。道案内の手作り看板をあちこちに立てた。



終点には、吊り橋の見える展望台を整備した。ベンチの板はつり橋の踏み板の再利用。途中で水車も造った。谷瀬という名の通り、水が豊富で昔は水車がいくつもあったといわれる。集落の人が力を合わせて地元の大工さんと造った、発電を兼ねた水車になっている。



草がいっぱい生えていた、廃墟同然のところを改修し「こやすば」を整備した。地元で私たちが山に入っていくと、30分に一回休憩をする。そういう場所、ポイントを「小休場」（こやすば）という。そこから散歩道を歩く人にも休んでもらおうと「こやすば」という名にした。谷瀬の生活風景の写真を飾ったり、昔の農機具を展示している。



昭和29年渡橋式のときの写真など昔の写真も展示。この吊り橋には当時のお金で一戸当たり、20万円だった。大卒の初任給1万円のころに。それまで丸太橋で渡っていたが、大雨の後は流させて孤立する。各家々でお金は負担し

ようと。それほどに吊り橋がほしかった。「ゆっくり散歩道」を天気のいい日などはずいぶん人が歩くようになった。水が豊富なので、谷水で冷やしたジュースなども無人販売している。

「寄合」では皆がアイデアを出して人気投票してやることを決めていく。どぶろくを作っ



て飲もう、なんていう気軽な発案が、しっかりと酒米を育て日本酒を作ろうとなった。地元住民だけでなく、奈良女子大学、奈良県立大学の

学生さんにも手伝ってもらっている。地域おこしに理解のある近くの酒造会社の協力で、酒造りの現場まで入って作らせてもらっている。最初にできたのが、2016年4月、みんなで名をつけて「純米酒 谷瀬」とした。

「ゆうべし」も名物。柚子をくりぬいて、味噌、蕎麦粉、米粉、ピーナツ粉、トウガラシなど薬味を入れて1時間ほど蒸す。それを冬12月から2カ月間干す。味噌の色がうつってきて茶色くなる。中くらいで一つ750円。産物で高菜もある。熊野地方の伝統的な「めはり寿司」があるが、この高菜の漬物でご飯をにぎったもの。昔は片手で持てないくらい大きく、かぶりつくと、目を見張ったのでこの名がある。今は食べやすい大きさになっている。

「ゆっくり散歩道」ができてから田舎体験のメニューも始めた。空き家を整備して「田舎体験ハウス玉岡」にした。外の人を受け入れるのに即移住は無理。こういうところに寝泊まりしてまずは谷瀬の暮らしを体験してもらおう。集落には店がないので、住民はここで宴会もやる。鍋会やクリスマス会など、畳の部屋はいい。昨年春に「つくりば」という加工施設もできた。

盆踊りもにぎやかに、公会堂、室内で踊る。十津川村では村内の集落ごとで、歌も踊りも違う。道沿いのチューリップ畑は、となりの集落有志が谷瀬の地域挙げての活動に共感し、球根を寄付してくれている。皆で世話している。十津川の栗「むこだまし」も作っている。道案内のかかしは、女性たちが作っている。



I ターンの第1号の方が、結婚するときは地域内で実行委員会を作り吊り橋を使ってイベントに。これは全国ニュースになった。いま谷瀬はベビーラッシュ。子供3歳以下が、8名いる。集落52人の人口の中で、IUターンは9世帯、21人となった。

【谷瀬に関わった人たちからの意見】

・奈良女子大学 室崎ゼミは2014年から関わっている。「ゆっくり散歩道」の看板作りや田植え、写真展示など学生がやってきた。学生の学びになっている。

・2014年に奈良女子大の大学院生だった、十津川村で修士論文を書いた。谷瀬の皆さんの地

域愛に感動した。皆さんに可愛がってもらい、地域の方々の中に飛び込んで行くことを経験した。いまは和歌山県紀の川市の地域おこし協力隊になっている。

・ドラム缶ピザ窯を友達と谷瀬に行って作った。イベントの時に使えるアイテム。谷瀬はいろんな人の応援もあって変化してきていると思う。

【質疑】

●感想・質問、○馬場さんの答え、()内は居住地

●8月のお盆の時にいった。吊り橋にも行ったが怖くてダメ。南北を貫く、国道がずいぶん整った印象だがその影響は？(丹波篠山市)

●2013年、吊り橋を渡った。ひなびた印象。いま散歩道は、どんなひとが来るのか。(東京)
○国道はここ10年ほどで良くなっている。ほぼ2車線になりつつある。人の動きが変わった。関西圏からは日帰りのところになった。宿泊が減って、ドライブコースになっている。関西圏から来る人が多い。



●「ゆうべし」と「純米酒 谷瀬」を前もって取り寄せた。「ゆうべし」は刺身と合わせても良いと思う。自分は移住定住の担当、21人の移住はずごい。地元の人柄が強くて弱くても移住者はダメ。いい感じなのだろう。(雲仙市)

●地域のお金を出して橋を架けた。みんなで何か作り上げることが根付いていて驚いた。雲仙にも「こぶ高菜」というコブのある高菜がある。加工所の建設費は？(雲仙市)

○外から人が入るには現金収入が必要。「つくりば」は物を作って販売できるように、地元と移住者と交流もできるようにという施設。村からの補助ももらっているが、建てたのは地区。管理も集落がしている。

●UターンとIターンの内訳、仕事は？（東京）

○Uターンが3世帯、Iターンは6世帯。「つくりば」ではまだ生活できる収入まで行かない。役場の職員、木工などやっている。ある程度収入ある人が移住している。30歳代がほとんど。

●食べ物と酒と景観はある。もうちょっとストーリー性がほしい。総合的な魅力があるといい。総合的なデザインが必要だ。（東京）

●インターネット環境は？（東京）

○日帰りが多くなり、国道から支線に入ってもらって体験型のツアーを村で考えている。谷瀬は、一貫性がないかもしれない。香り米も作ったりもしているが。原材料までで、加工、販売までできていない。いずれ食事もきっちり提供するところを作りたい。集落では毎週「男子会」といって飲み会をやっているが・・・インターネットは15年ほど前に、村内すべて光ファイバーを引いて、ケーブルテレビを見ている。5～60メガくらいで電波が飛んでいるので、テレワークの方にもストレスなく情報関係の仕事ができる。ワーケーションなどにもいい。

●「ゆうべし」で、柚子の皮が活かされているのは珍しい。日本酒に合う。（掛川市）



○各集落で味が違う、一味をたくさん入れるところもある。茶粥のおとも、お茶漬け、日本酒のあてにぴったり。長持ちする。

●妻と初ドライブが谷瀬の吊り橋。吊り橋効果で結婚できた。移住者をよびこむ作戦は？（紀の川市）

○何が売りははっきりわからないが、住んだ人が新しい人を呼んでいるのかも。空き家はないか？と問い合わせがどんどんある。住むには取り決めがある。『谷瀬で暮らす』というパンフ



を作り、移住希望者にお示ししている。こういう会費がいる、大字だと水道はいくら、ゴミはどう捨てる、納得してもらおう。

.....
皆はあらためて十津川村へ、谷瀬へ、行ってみたくなりました。集落の人たちが動き出すことで、外からの人たちも呼ぶことができたということがよくわかりました。ただ、移住者を待っているだけではだめなのですね。この後、お酒や「ゆうべし」を注文された方も多かったようです。（記録：事務局野口）

